

う。又、添品が妙本の訳文を襲用したのは、偏へに妙本の文体が周到精緻、然も流麗にして至らざるなき名訳であつたために更に屋上架屋の愚を演ずるを嫌つた故であらう。三訳を存しつつも独り妙本のみが、中国にあつても、又本邦に於ても、一代を風靡して今日に到つた理由の一斑として、その訳文が上の如く最高の粹を示せるものであることは銘記されねばなら

教義と教学

芹 澤 寛 哉

従來本宗に於て「教学」と称せられていたものが果して学としての教学であつたか否かを方法論的に吟味することによつて「学としての教学」の在り方を考察することがこの小論の意図である。

古來宗学の立場は宗祖の依経不依人の立場を基本として、少しも私見を交えず、たゞ經文に任せて、説いたものであつて、これは學問の立場と異なるのは勿論であつた。反之天台の立場は、五時八教等の範疇（自己の哲學的見解）を中心として法華經乃至一代聖教を体系的に組織したものと考えられるから、それは一つの完結した學問体系と云うことが出来よう。しかし全く私見をたてないで學問を組織するということは元來不可能で

ぬ。

因みに言ふ。本宗の祈禱肝文は妙本中よりその最も強調されたる句を抜粋して之を再編せるものなるが故に、当然の歸結として文中にHの音韻を反復すること極めて多く、誦誦によるその発声上の効果が、信仰者をしてより以上に心氣の高揚を齎らしめる結果を生ずること多き文体となつて居る。

あるのみならず、却つて最も強い積極的立場を示すこともあり得る。

教学とは教義を材料としてそれを學問的方法によつて組織体系化したものであるならば、かゝる學問は何故に必要であるか、その組織体系化はいかなる方法によつて可能であるか又如何なる論理的性格をもつべきであらうか、果して教義の盡くを組織しつくすことが出来るであらうか、これらの課題は一宗の教義が單なる信仰内容の告白であるに止まるとなく客觀的に妥當なるものとして、内には宗教の弁証として、外には護教的役割を強めるためにも、解決されなければならぬものであると思ふ。

右の課題に関する手掛りとしてキリスト教神學の立場を考察する。

キリスト教の歴史に就て見るならば、信仰が最初のまゝの單純な信頼感に止まらず、高められて確信となり、更に反省され

て思想の形をとつて「教」として説かれ、教義内容が反省されることによつて即ち、理性によつて、考へられて普遍性を有する学問の形態をとる様になり、茲に神学が成立したのである。歴史の宗教としてのキリスト教に於てかゝる必然的経過をとつて發現した神学が対内的にはキリスト教の弁証となり、対外的には護教の役割を果して來たのは周知のことである。

カトリック教会における教義は、教会の傳承に含まれた信仰内容が教総會議に於て承認され、又は必要に應じては法王の宣言によつて教義として定められたものである。かゝる意味の教義がプロテスタントには無いのは当然であり、そこにはたゞ信仰についての教があるのみ。

この様な手続を経て成立したものを教義と云うならばかゝる教義は嚴密な意味で本宗には存在しない。故に教義よりもむしろ「宗乘」の語がふさわしい。しかし傳承的な教義は、學問であるよりも、信仰内容の表現として考へらるものであるから、成立の手続の点を別として、やはり教義であらう。而も以前は學問的反省的立場と考へられていた天台教判の相当部分が傳承と共に教義化したということも亦認められなければならない。

神学なる語はもとギリシア哲学において既に用いられているのであるが、キリスト教に於ては、神とその啓示、救済を合理的に説明しようとする學問、即ち、教会によつて予め定められている教義を前提し、論理的思弁によつて、キリスト教の神觀

世界觀、救済觀を組織することが目的なのであつた。その爲の學問的方法として、アリストテレス的論理学を用いたのでありこれは通常組織神学（合理神学）と呼ばれる。

合理的神学は自然認識の方法をそのまま、神の認識に適用せんとするもので自然神学ということも出來よう。この方法による神の認識が可能であるためには、自然的存在と神とは、直線的連続の關係にあり、理論的認識の道を究極まで推し進めて行けば神に行きつくということが前提されていなければならない。しかしキリスト教信仰の特質は神と人間との絶對的断絶であり人間の側から神に至る道は存しない、たゞ神の側からする恩寵のみが人間を救済に導く、というのであるから、合理的方法の徹底は結局、キリスト教信仰の否定に終る外はない。

これに対して超自然主義的神学の立場は信仰と知識を識別し信仰の特質を護らんとするものであるが、學問的方法として見るときは啓示にそのまま従うということから、聖書の文字への固執、又は傳統への執着となり、更には自然科学等の科学を無視し、それらの領域にまで超自然的啓示の説明を一方的に適用せんとする傾向にを有するに至る。

以上の外プロテスタントに於て用いられている方法、歴史的方法、批判的方法、弁証的方法等何れも前記の方法におけると同様な難点に遭遇せざるを得ない。

キリスト教神学の諸方法に於てかゝる困難が生じたのは、結

局神の超越性と自然的存在たる人間の絶對的異質性に基くと云はなければならぬ。

教学が教義を基として組織せられねばならぬものである限り教義に対する承認と、学問的要求の満足という二つの要素が満

本門本尊の在り方

一尊一士正境論

竹 田 日 潤

一、観本鈔(九四〇)『観心本尊鈔の略称』の驚動耳目とは何か。五重三段説示の理由如何。末文(九四八)の讓與とは何を指すか等は、皆一尊四士必要論の聖語であるから『観本鈔に一尊四士なし』と公言してある某大学匠の主張は誤つてゐる。不肖日潤は真蹟写真版対照の観本鈔全文を真読で一時間廿分で檀徒の法事に拜んでゐる。毎朝夕の勤行にも全読し、全文の素読二千回以上に及んでゐる。五字の金塊の内に此珠を裏み、との御聖意をば『五字の袋の内に』と読ませ、文王を成王と悪訂正し本師を本時と読ませてゐるが如き印刷物の観本鈔は百万年拜んでも御聖意は断じて爪の垢程すらも判かるものではない。中山の二具十体、玉沢の一尊四士国宝画像等は観本鈔の文上通り正

たされなければならぬ。佛教の宗学に於て、学としての教学はいかなる方法をとるべきかの課題は、キリスト教と対比して見た場合、キリスト教に於て見出されない「法」の問題が、一つの重要な手がかりを示していると言ふことが出来る。

直に実行されたものであるが、文底の御聖意は一尊一士であらねばならない。

二、百界千如も十界互具も、支文止前四卷等に説く所であつて、非情の国土世間不顯、草木不成佛、木回本尊無救済の劣法であるとは、観本鈔の序文に於て大聖人がしつこい程懇説してゐられるから『十界本尊の曼荼羅』との如き不完全極まる不成佛の惡熟語は、聖滅後の人師の創作であらねばならない。且つ『十界曼荼羅を以て本尊とされた』と云ふ大聖人の実跡もなく又其文証としても御眞蹟遺文中には唯の一語も無いのである。且つ本門八品中に於ても無経証であり、釈尊の金言無しと云ふ実狀だ。宗教の魂たるべき本尊が日蓮に於て斯くも不意なものであらうか。六百五十年間の学匠上反省せよ。二処三会の靈山顯現其物が一幅の十界曼荼羅本尊であるとか、或は起顯竟其物が十界本尊であるとの如き無宗学、無智の無信心をさらけ出すやうでは不憫の至りである。但し、神力別付を実行化し、本門成境の聖境に於て本門授戒の証として『本門題目の曼荼羅は』是非共なければならぬものである。其経証は教菩薩法佛所護